



ゲーテンベルク聖書

浅石 卓真

南山大学図書館の1階、NEWSコーナーの手前に、ガラスケースに入ったゲーテンベルク聖書(復刻版)が置かれていることを知る学生は少ない。ゲーテンベルク聖書とは、15世紀半ばにヨハネス・ゲーテンベルクが集大成した活版印刷術により製作されたラテン語訳聖書である。当時ドイツで180~200部程度が製作されたと言われており、そのうち48冊が現存している。カトリック文庫やキリスト教コーナーと比べてあまり目立っていないが、このゲーテンベルク聖書は復刻版とはいえ、「南山」「大学」「図書館」をそれぞれ象徴するものに思われる。

まず、「南山」学園はキリスト教世界観に基づく教育組織であり、そのキリスト教において聖書は特別な位置を占めている。すなわち聖書はキリスト教の聖典であり、古代から現代にかけて日々の礼拝で朗読されてきた。また歴史的には、例えば近世にルターの翻訳したドイツ語訳聖書が宗教改革の広まる一因となったことがよく知られている。それまでラテン語で書かれており聖職者しか読めなかった聖書を、一般民衆も読めるようになったからである。南山大学のキャンパス内にあるイエス・キリスト像やマリア像とともに、図書館のゲーテンベルク聖書は南山学園の世界観を象徴するものの一つである。

次に、ゲーテンベルク聖書のような研究対象にもなる書物は、「大学」という研究機関の象徴でもある。中世の大学において書物が保管されていたのは教授や学生の私文庫であり、その後も写本は貴重なため図書館の机や書架に鎖で繋がれ、基本的に貸出はできなかった。現在でも、特に人文科学の研究者が資料収集のため国内外の研究機関に足を運ぶのは珍しくない。このように、書物と研究活動とは密接に関係しており、大学図書館の特殊コレクションはその大学の研究領域を反映している。南山大学図書館のカトリック文庫も、近代日本のキリスト教史を研究する国内外の研究者に資することを目的に開設されたものである。

最後に、現在のように膨大な図書を所蔵する「図書館」の始まりは、ゲーテンベルク聖書を製作した活版印刷術に求められる。活版印刷術の普及により、それまで一冊ずつ書写で製作されていた書物の生産性が飛躍的に向上した。出版点数が大幅に増加した書物は、王侯貴族の私的文庫や修道院では管理しきれなくなり、公的な(特に国家単位の)図書館で収集されるようになる。さらに言えば、現在の図書館に所蔵されている図書の原型も活版印刷術に見出せる。活版印刷術を機に次第に書物の規格が統一され、現在の図書の形態に近づいたからである。

ところで近年、ゲーテンベルク聖書のような貴重書を大学図書館がデジタルアーカイブとして公開する動きが広がっている。これには教育・文化活動を活発化させるほか、人文科学を進展させる可能性を持っている。例えばアジアで唯一ゲーテンベルク聖書の原本を所蔵する慶應義塾大学が実施したHUMIプロジェクトでは、海外の図書館と協力して複数のゲーテンベルク聖書をデジタル化し、高解像度の画像として比較することで、15世紀の活版印刷について多くのことを明らかにした。デジタルアーカイブの規格化も進み、デジタル人文学という世界的な研究潮流を後押ししている。本学の貴重なカトリック関連資料についても、より一層の体系的なデジタル化と公開を期待したい。

(ASAISHI, Takuma : 人文学部准教授)

クリシタンに導かれて 田北耕也氏のこと

はじめに

田北耕也 (TAGITA, Koya, 1896-1994) 氏は、かくれキリシタン研究の先駆者として知られている。田北氏のカトリック入信記「求道二十年」によれば、父の死をきっかけに真理の道や宗教的な悟りを求めて、プロテスタントや仏教などの宗教を遍歴、九州各地の学校での職を転々としながら現地研究を続けるなど激動の人生前半を過ごしたのち、1948(昭23)年に本学の前身である名古屋外国語専門学校に52歳で入職。本学在職中の1954(昭29)年に20年以上に亙る研究の集大成として『昭和時代の潜伏キリシタン』を書きあげ出版に至った異色の研究者である。『昭和時代の潜伏キリシタン』の最大の特徴は田北氏自身が各地に出向き、直接見たこと、出会った人々から聞いたこと、そして自らの手で集めた資料を中心にまとめたことであり、今でもこの分野の研究者が必ず目を通す貴重な研究書とされている。本号では、本学と所縁の田北氏について、その人生と業績を紙幅の許す限り点描してみたい。

1. 父の死

(1)「死とはなにか」：1915(大正4)年

田北氏が宗教や哲学に目覚めた大きな契機は、中学を卒業した19歳の時の父の死であった。父は大阪商人と設立した合弁会社の登記をした日に病床に就き、半年後に58歳の若さで亡くなった。故郷を出て一旗揚げようとしていた矢先にあっけないほどの死を遂げたことで、「私も人生の門出で倒れるかもしれない」「死後はどうなる」と身につまされ、「死とはなにか」の答えを探し求める人生を歩み出した。もともと田北氏は故郷の奈良県月ヶ瀬村で神仏を大切にす風俗習慣の中で育ち、宗教的な事柄に対し畏敬の念を抱いていたのである。それが父の死をきっかけとして、キリスト教徒(プロテスタント)となり約15年間、仏教系の信徒として約7年間を生き、この20年余りの間にキリシタン研究を始めて、その後はカトリック教徒として残りの生涯を過ごすこととなった。宗教や哲学への飽くなき探求心に突き動かされた田北氏は、信念の実践を徹底するあまり、学業・職業・研究・信仰において変遷の多い人生を送ることになる。そのあたりのことについては「求道二十年」に詳しい。

(2)プロテスタント、そして一燈園へ：1917(大正6)年～1937(昭和12)年

日本組合基督教会大阪教会で同志社大学教授の日野真澄氏の説教を聞いたことをきっかけに、熱心にプロテスタントの教会に通い、母と妹と三人で宮川経輝牧師より洗礼を授けられた。当初は充実した教会生活を送っていたが、次第にその信仰に飽き足らなくなった。通っていた教会が「死」や「教義」について共通の答えを明示しなかったことや、田北氏が神学校を志望した際、牧師らに認められなかったことなどがその理由であったらしい。この頃、田北氏は亡父の会社を継ぐためその会社で働きながら大阪高等工業学校に通っており、経済的に厳しい生活を送っていた。その困窮の原因は生活の安定を第一にしたからだと一途な信仰心で聖書を解釈し、「神の国とその義」を第一義として牧師になれば神様から直接に養われ生活の心配はなくなると考えた。そのことを牧師に伝えれば喜ばれると思っていたが、学業を続けるよう諭されたうえに当面の生活費を渡され落胆する。

大阪高等工業学校を卒業後は「人は生活のためにあくせくしなくてもよい、『神の国とその義』を第一義追及する」として、企業には就職せず教員になった。母が亡くなった後、教会の有力者に学費を援助され東北大学理学部の助手になったが、自然科学の究極的価値に疑問を持ち、また学費援助を断りたかったこともあって一年足らずで教職に戻る。その後4年間ほどは、日本組合基督教会大阪教会の伝道師に招かれ熊本の女学校の復興に尽力したり、四国の松山市にある私立夜間商業学校を手伝ったりしてクリスチャンとしての生き甲斐を求めたが、内心の空虚に耐えられなくなった。「大学にはいって哲学や宗教を勉強したら、ほんとうの人生がわかるだろう」と九州帝国大学に入学したが、大学で学ぶ哲学からも答えを得ることはできなかった。

大学卒業後、学んだ東洋哲学の影響もあって、1930(昭和5)年に仏教系の一燈園に入る。田北氏によると、一燈園では「すべての欲望、救われたい、救いたいとの欲望でさえも、いっさいがっさい放棄しなければ、空無のサトリにはいれない」「死んだつもりで奉仕する(懺悔の生活)」「人間の知的欲求を妄想とする」などの教えがあり、信者は断食、奉仕、勤行で修行する。特によく行った修行として、下坐の心を養うために他家の便所掃除を行う「六万行願」をあげている。長崎出身の浦川和三郎神父の甥である友人、岩永正巳氏は田北一家の一燈園入りを心配し、長崎に留める一策としてコルベ神父に田北氏を通訳として紹介したらしい。田北氏も一燈園の教義の実践の一端として、コルベ神父に半年間の奉仕をすることを決意する。

後に、田北氏は一燈園での7年間の生活は「思想的な地獄」であり「一生の苦行」であったと述懐している。結局、子どもたちの将来を考えて一燈園の生活も入園の際に預けた預金証書もなにもかも捨て、最終的にカトリックの洗礼を受けるに至るというまさに「求道二十年」の表題が示すとおり、何事にも誠に一途な宗教心がここにかがえる。

2. かくれキリシタン研究へ

(1)「死んでのち、人は、どうなるのでせう」：1928(昭和3)年

志半ばで死んだ父を見送った19歳の田北氏にとって、「父の死は、私自身の死」であり、「死とはなにか」について真剣に考え、30歳の時にその問いの答えを模索して新設の九州帝国大学法文学部に進む。「新設の法文学部は、傍系の志願者も、入学試験の関係上、許可された」とある。しかし大学で学ぶ哲学に失望し、教授佐野勝也氏のもとで、小学校児童を対象に、日本人の宗教心についての調査を始める。質問用紙を一万枚印刷して、近畿・四国・九州の六県下、関係深い市町村の四十何校をまわる中で、1928(昭和3)年、キリシタンの住む長崎の黒島を訪問する。そこで「死んでのち、人は、どうなるのでせう、別の世界(ちこく、ごくらく、めいど、てんごくなど)が、あるのでせうか、ないのでせうか」という質問に対し、死後の世界が三種類あるという回答を得て、プロテスタントとは異なるカトリックの教義に触れる。その後、佐野氏の斡旋で就職した活水女子専門学校の校舎から霞んで見える伊王島を訪ねるうちにその地域を担当する松岡孫四郎神父と親交を持つ。

(2)松岡神父との親交：1929(昭和4)年

松岡神父は1887(明治20)年3月20日、長崎市三原町に誕生。誕生の3日後、浦上教会主任ペルー神父(PELU, Albert-Charles) <注1>により受洗。1867(慶応3)年から1868(明治元)年の迫害で祖父母、両親らが他の浦上信徒と共に流罪されたキリシタンの系譜である。四男である松岡神父は、迫害のため島根県津和野の「三尺牢」で死去した祖父の名を取って孫四郎と付けられた。1901(明治34)年、長崎大浦の公教神学校に入り、1918(大正7)年2月、司祭に叙階、同年3月伊王島の馬込教会主任に任じられた。『素顔の名古屋教区』には「同教会は大名寺、高島、善長谷にも布教所を持ち、所属信者は二千四百名を超えていた」とある。また「(松岡)師は小舟を使って布教所や信者の家を廻り、教会では黙想会、大人、青年、子供別の公教要理など信者の信仰が堅いだけに多忙を極めた。他面、姉崎氏等を指導し、キリシタン関係の論文訂正に協力した」とある。1938(昭和13)年、50歳で出生地である浦上教会の主任、1941(昭和16)年3月に名古屋と新潟教区長、1962(昭和37)年4月に初代名古屋司教に任命された。1946(昭和21)年7月、本学の前身である南山外国語専門学校の設立が認可された際、松岡神父は南山学園の設置者である教区の代表者として、本学園の第2代理事長の職にあった。1948(昭和23)年9月に、田北氏が名古屋外国語専門学校(南山外国語専門学校から改称)に入職したことと無縁ではあるまい。

田北氏の論文「中部キリシタン史に見る日本人の世界性」の注記には、「私が伊王島に通り始めたのは島の司祭松岡の人物に引きつけられてのことである。キリシタンのこの島への移住、定着、発展を見聞しながら『伊王島切支丹の社会的研究』を書き上げた。それは昭和四年の夏休みのことであったが、その小文を九大教授の佐野勝也が、東大図書館長の姉崎正治に見せたのは、どういう機会であったか知らぬ。見せた事実が私にわかったのは『昭和五年から三年間、帝国学士院の研究補助費を毎年六百円づつ与える』という姉崎からの突然の通知による。私が姉崎の著書を読むようになったのは、それから後のことである」とある。田北氏に与えられた研究のテーマ「切支丹部落の社会的研究」も、当時田北氏と面識がない姉崎氏が予め決めていたとある。

(3)かくれキリシタン研究へ：1930(昭和5)年～1932(昭和7)年

姉崎氏は母校である東京帝国大学に宗教学講座を開設し、多くの門下を育成、日本の宗教学研究の礎を築いた人物として知られ、『切支丹宗門の迫害と潜伏』などキリシタン関連の著作も多い。前述の佐野氏は姉崎門下の出である。「珍しい資料を発見するたびに持参して、私は一九三〇年から、個人的に指導を受けました。先生から最も強く印象づけられたのは、宗教学にとって本質的な、私見を肯定されたことです。私見とは信仰と実践が大切で、著述は第二義だということです。だから私の著作の遅延をとがめず、私の一燈園における仏教修行や、コルベ神父との仮修道院生活を高く評価してくださいました」という姉崎氏についての一文からも、自らの信仰を追求しながらの田北氏の研究活動を姉崎氏が温かく見守っていたことが感じられる。

『昭和時代の潜伏キリシタン』には、1930(昭和5)年から3年間にわたり支給された研究補助費で「伊王島でしたと同様の調査を長崎市から八里北の西彼杵郡黒崎村に及ぼそうとし、そこで始めて〔ママ〕潜伏キリシタンにぶつかったのである」とある。

『オラショ紀行：対談と随想』に収録された皆川達夫氏との対談「隠れキリシタン発見余聞」によると、「3年間の研究費を与える」という通知の後どうしてかくれキリシタンの発見に発展したのか、という皆川氏からの問いかけに対して、「全く偶然、ハプニングの連続です。そして今日もおつづいているという感じです」「最初は黒崎村でのハプニング、姉崎先生の研究テーマの横すべりが五島列島から、生月、平戸へとすべりつづけました。そしてその内容がわかればわかるほど、四百年の昔にさかのぼり、迫害の理由、追放の思想的根拠等を考え直すことになります。そのことに学界の注

意を向けるため、まず現存する隠れキリシタンの実情報告としてあの一書を出版したのです」「黒崎地方では仏教徒とカトリックがいりまざっているのです。だから、伊王島でしたような調査はとても面倒なんです、たくさんの研究費をいただいているし、私も調査が好きでしたから、とうとう、黒崎地方の家を一軒一軒片っ端から、どの家が仏教で、どの家がカトリックか調べて分類しようと村の俯瞰写真で始めたんですが、容易な仕事ではありませんでした」とあり、「この家は仏教徒なのか、カトリックなのか」と何回も小学校の先生に食い下がっていくうちに、カトリック教徒にもならない昔のままのキリシタンが存在することを聞き出したことを発端に、かくれキリシタンの人々との出会いや『天地始之事』の写本の発見に至る様子が語られている。そして、この頃から佐野氏の勧めもあり、姉崎氏が初代会長を務める創立間もない日本宗教学会誌『宗教研究』に研究成果を発表するなどかくれキリシタンの研究活動を本格化させていくのである。田北氏の調査や活動については中園成生氏の「かくれキリシタン研究者・田北耕也氏の業績」(生月町博物館 島の館だより, No.9) (2005)に記載があるので参考にされたい。

〈注1〉ペルー神父はバリエ外国人宣教会の神父で、本学カトリック文庫所蔵の『平戸御水帳』には洗礼を受けた神父の名前の欄に「アルペルツァ ペルサマ」と記されている。ペルー神父については『南山大学図書館カトリック文庫通信カトリコス』No.29(2014)に詳しい。

3. コルベ神父との出会い

(1)「真理は一つですか、二つですか」：1930(昭和5)年

田北氏の人生に大きな影響を及ぼした人物のひとりがマキシミアノ・マリア・コルベ神父(KOLBE, Maksymilian Maria)である。1941(昭和16)年、コルベ神父はナチスの強制収容所で餓死室に送られる妻子ある囚人の身代わりとなって殉教し、1982(昭和57)年に列聖されたことは周知のとおりである。日本での宣教活動は1930(昭和5)年4月から1936(昭和11)年5月までのわずか6年間だったが、来日後のコルベ神父の行動は敏速だった。キリストの福音と聖母マリアの愛を日本人に伝えるために、聖母マリアの月(5月)に布教誌の第1号を発行したいと決心するや、長崎教区から発行の許可を取り付け、印刷機を購入し、日本語もままならない中で、一か月もたたないうちに日本語による月刊誌『聖母の騎士』を創刊し、一万部発行するという驚異的な偉業を成し遂げた。



コルベ神父らとともに (南山アーカイブズ提供)

田北氏がコルベ神父と出会ったのは、一燈園に家族と共に入園した直後の頃である。かくれキリシタン研究とその調査のために度々長崎を訪れていた田北氏は友人を介してコルベ神父を知る。コルベ神父はゼノ修道士ら数人のポーランド人フランシスカンと共に宣教のため来日したばかりで、長崎市大浦天主堂の直ぐ下にあった旧雨森病院跡を仮修道院としていた。田北氏は、ここで半年間コルベ神父らと寝食を共にし、研究活動の傍ら、『聖母の騎士』の出版の手助けをした。一燈園での修行が始まったばかりの田北氏は「何事にも動じることなく、何物をも求めないで真理なしに落ち着く」ために、一燈園主のいわゆる不二の境地を実生活を通じて体験実証しようと身を粉にして修行していた時である。それゆえにキリスト教に勧誘しようとする気配には敏感で、反射的にそれを拒む姿勢となったようである。コルベ神父との忘れられない思い出として同誌の中で次のようなエピソードを挙げている。

1930(昭和5)年末のある日曜日、仮修道院の物干し場みたいところで、一同が日向ぼっこをしているとき、コルベ神父が「田北さん、真理は一つですか、二つですか」と話しかけてきた。私の答えは「真理が一つであろうと二つであろうと、そういうことを考える必要のない生活を私はいまこうして実践しているのです」そうって突っぱねた。コルベ神父は田北氏の批判的態度を見てとったらしく、「おっほっほ」と印象深い弱い笑いを残して沈黙し、それ以来、信仰の話をしなくなり、田北氏はこれでコルベ神父らを封じ込め、彼らが敗北したと思った。それから7年後、紆余曲折を経て、一家でカトリックの洗礼を受けた時にコルベ神父と活動を共にしていたゼノ修道士が駆けつけて「ワタシ、アナタノ

タメ、八年イノリマシタ」と喜び祝ってくれたことについて「いくら説いても聞こうとしない私に、度しがたいやからと怒るのでなく、縁なき衆生とあきらめるのでもなく、“祈り”という最後の武器を用いた。耳をかさぬのは、私の中に巢食う悪魔のせいと信じ、祈りをもって、それと戦っていたという。それが、なんと八年間続いたのだ。布教上の最も有力な武器は議論でも説教でもなく、この人達の絶えず倦まざる祈りの賜物だった」と述べている。

田北氏はその後もエッセー等を度々連載して『聖母の騎士』誌との関係は生涯途切れることなく続いた。1987(昭和62)年、田北氏91歳の時には「私は齢九十を超えました。天に召される前に、コルベさんのことをぜひ、ゆかりの騎士誌に書き残させていたいただきたいのです」として、「私の中のコルベ神父」を1年間に亘り連載する。「コルベさんとの接触で次第に分かってきたのは、祈りの効験です」と書き記したこの連載が、田北氏の最後の記事となる。

ナチスの強制収容所に送られたコルベ神父は牢内でも全く毅然としており、他の囚人を励ましながらかつて祈りを唱え続け、餓死室で静かに息絶えたという。一方、田北氏は「仮修道院は、もとホテル(病院の誤りか)であった古い建物で、私に与えられた部屋は甚だ大きく、寒い冬を過ごすのはらくではなかった。しかし長崎にいる隠れキリシタンの発見には、このような異状な清貧生活が役に立った」「離島のキリシタンを最もひんばんに往訪したのは、この神父の一行と共に住んでいた時代で、自転車を押して山坂道を上ったり、小船にゆられて酔いながら、村々島々をまわったのは、このフランス人たちの積極性に負けまいとする、私のガンバリでもあった」と、コルベ神父との出会いがカトリックへの入信だけでなく、研究活動の礎になったことを記している。

(2)一燈園から長崎へ：1937(昭和12)年～1938(昭和13)年

田北氏が33歳から40歳までの7年間に及ぶ一燈園生活から無一物で脱して、長崎に向かったのは1937(昭和12)年のことである。キリシタン研究の友人を頼って、同年9月に長崎県公教神学校の教授の職を得る。当時、長崎公教神学校が七年制高校に昇格のため、自身の九州帝国大学卒業の免許状が活用されたとの事情があったようであるが、この幸運を氏は次のように語っている。「信者でもない私、カトリック教会はむしろ、素通りで長崎を去った私を、どうして神学校に迎えてくれたか。天から降ったおめぐみと思うほかはない」。また未信者のままでは、放っておけない地位なので、神学校の校長浦川神父に公教要理を教わり、その一年後、すなわち1938(昭和13)年6月4日に一家全員、山口愛次郎神父より受洗することとなったと述べている。

4. 南山学園と田北氏

(1)南山学園へ：1948(昭和23)年～1960(昭和35)年

田北氏と南山学園の縁をさらに探るために学園史、『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007南山学園創立75周年記念誌』を紐解いてみたい。

1952(昭和27)年5月、南山学園と長崎東陵学園の合併が認可され、長崎南山高等学校・中学校が発足する。合併に至る経緯を辿ると、松岡神父以外にも田北氏と南山学園を繋ぐ糸口が見えてきた。以下に学園史から関連箇所を一部抜粋する。

■長崎東陵学園と長崎教区長山口愛次郎司教

財団法人長崎東陵学園は1930(昭和5)年3月18日に設立され、元長崎公教神学校跡地に東陵中学校を設置した。設立者(理事長)は、カトリック長崎教区長司教山口愛次郎、初代中学校長は田北耕也であった。(山口司教は田北氏に洗礼を受けた人物である。)その後長崎東陵学園は経済的に行き詰まり、1948(昭和23)年5月、山口司教は多治見の神言修道院で、長崎東陵学園の再建と経営負担は長崎教区にとって重く、南山学園に譲りたいと述べた。南山学園としては、専門学校を申請大学に改めるときで、東陵学園の継承には慎重であったが、神言会にとっては、日本人司祭および修道者を養成するために、長崎教区は最も期待すべき有望な土地柄であった。

■神言会と山口司教

山口司教は太平洋戦争のさなか、日本軍占領下の南太平洋諸島の教会保護と原住民カトリック教徒司牧のため1943(昭和18)年8月、オランダの神言会が司牧しているオランダ領フロレス島のエンデに行き、約二年間、巡回司牧を続けた。フロレス島の神言会司祭や聖霊会修道女らの数十名が無事に活動を続けることができたのは山口司教の努力によるところが大きかったようである。このような関係から、神言会は戦後、山口司教の要望に応じて長崎教区の司牧活動を分担することとなった。

田北氏と山口神父との縁、そして山口神父と神言会の繋がりが田北氏と南山学園を結ぶ遠因としてあったようにもうかがえる。田北氏は1941(昭和16)年10月、長崎東陵中学校を退職した後、長崎県の浦上神学校、長崎県立長崎中学校、長崎県立諫早商業学校、長崎県立佐世保商業学校といくつかの学校で勤務した。長崎東陵中学校を退職した経緯について「自ら創立に尽力した長崎教区の私立東陵中学校長の席を、昭和十六年の秋に、軍人のサーベルで追われた時、県の学務課には(天理教の)中山真柱と関係深い藤本藤治郎氏が居た。私の追放に同情し、まず長崎中学校に招き、二年後に右の校長の席を与えてくれた」と語っている。その後、1948(昭和23)年名古屋外国語専

門学校の教授となる。

まず当時の南山学園の状況について概観しておこう。学園の経営は1948(昭和23)年度以降名古屋教区から神言会に移ることとなった。学園復興の推進者として実務に当たったのはアロイジオ・パッヘ神父である。パッヘ神父は戦後の学園復興をまず戦火によって荒廃した校舎の復旧から着手し、同時に学園設立の目的であるキリスト教世界観に基づく宗教教育の実施、創立者ライネルス師の教育の理想を実現し、彼の抱いた学園発展構想を継ぐためにまず高等教育から始めることを考えた。

田北氏の学園への着任については次のように記載されている。「パッヘは南山中学校・南山高等学校・南山外国語専門学校の三つの校長職を兼ねて学園長と呼ばれたが、事務繁多のため高等学校・中学校の校長事務代行者を置くこととなり、外専教授木村太郎に兼任させた。大学設置のため、一九四八年度には外国語専門学校に八名の専任教員と五名の非常勤講師が就任し、九月に着任した田北耕也(元長崎東陵中学校長、長崎県立佐世保商業学校長)が木村の後を継いで、高等学校・中学校主事となった」。また南山高等学校の校内新聞『NJS』第3号(昭和23年10月10日発行)のインタビューに応じて、初めての名古屋の印象や学校、生徒、教職員に対する印象と共に今後の抱負について語っている。具体的には町で受けた親切な対応、親しく話しかけてくれる生徒の様子などから名古屋は佐世保よりも和やかだとの印象を述べ、掃除の行き届いた校舎に好感を持ち、パッヘ神父をはじめとする教職員には初めて会ったときから旧知の親しみを感じたと述べている。

1947(昭和22)年3月の学校教育法の公布により、旧制高等学校、専門学校は廃止され、1949(昭和24)年田北氏は新制南山大学の宗教学の教授に就任、同年9月に創設された南山大学附属人類学民族学研究所の正所員となった。1951(昭和26)年11月に大学で開催されたキリシタン資料展示会で説明する田北氏の様子を記録した写真がいくつか残されている。

そして1954(昭和29)年10月には田北氏が昭和初期から取り組んだキリシタン研究の集大成『昭和時代の潜伏キリシタン』が刊行された。そして、その2か月後には早くもアメリカから講演の招待があったようである。



キリシタン資料展示会で説明する田北氏
(南山アーカイブズ提供)



神言会第5代総会長 アロイジウス・グローセカッペンベルクとともに
(田北氏は前列左から2人目、右から3人目がパッヘ神父)
(南山アーカイブズ提供)

(2) 家族とともに

版を重ねて1978年に出版された『昭和時代の潜伏キリシタン』(第3版)には、「老妻ヒサ五十五年間の内助、私の大学卒業論文タイプ印字に始まり、本書初版の原稿は全部その手で清書された。老後のヒサが計らずも南山大学留学生別科の書道講師に就任すると、長女で黒崎勝夫人の京が肩代りし、私の粗字悪文が、この程度に仕上がったのである」と家族への謝辞が述べられている。妻ヒサ氏とは、熊本の大江高等女学校在職中に27歳で結婚。「『貧乏生活をするんだよ』。結婚時の私の要求に『ハイ』とすなおに答えた彼女は、実は神風連一四四人の台所をまかなった荒木同の孫娘だった。私へよりも神への従順(ハイ)だった」とある通り、一燈園での一家全員での共同生活、九州各地での生活も共に経て、常に田北氏の研究生活を支え



若き日の田北夫妻 (浜口美由紀氏提供)

続けた。前述の黒崎勝氏の父は黒崎天主堂の前に住んでいた黒崎平十氏で、田北氏が黒崎村を訪問した際、宿を提供していた人物である。黒崎勝氏は京夫人とともに名古屋に在住、後述の名古屋キリシタン文化研究会会報第4号(1972)には「田北氏による写本『天地始之事』の発見」を寄稿している。田北氏の信仰も研究も家族と共にあったことがうかがえる。

(3)『昭和時代の潜伏キリシタン』刊行後

南山アーカイブズに保管されている田北氏の履歴関連資料の中には1955(昭和30)年7月30日付けで「学術上視察のため昭和30年8月8日より向う1年間アメリカ合衆国への出張を命ずる」という記録が残っている。またその後、出張期間の延長を申請して、帰国したのは1957(昭和32)年5月28日と記されており、長期に亘る出張中に米国各地で講演を行ったようで、その時のリーフレットも残されている。1960(昭和35)年に南山大学を退職されるが、1962(昭和37)年までの8年間に渡米4回、渡欧2回を含む国内外で三百何十回の講演をしたという記述があるので、『昭和時代の潜伏キリシタン』を刊行した後は、田北氏は大学にはほとんど不在だったのではないだろうか。一方で田北氏による学術誌への論文掲載は、1952年に刊行された南山大学紀要『アカデミア』第1号に掲載された「生月の十一ヶ條(もろもろのキリシタン知るべき條々の事)」をはじめとして、本学在籍中の1950年代に集中している。教職を転々とする生活から離れ、研究機関に身を置き、生涯で初めて落ち着いた研究活動の期間となり、また研究成果を広く内外に発表する機会に恵まれたことは間違いあるまい。



田北氏の自室 (1980年4月)
(浜口美由紀氏提供)

その後は名古屋造形芸術短期大学や同朋大学で教鞭をとられた。また本学名誉教授青山女神父が発起人となり1970(昭和45)年に発足した名古屋キリシタン文化研究会会員として第1回講演会の講師に名を連ね、当研究会に最晩年まで参加された様子が会報に記載されている。そして1994(平成6)年2月19日帰天、享年97歳であった。



米国講演会のリーフレット (南山アーカイブズ提供)

5. 田北コレクション(田北氏入手史資料)

(1)「田北コレクション」とは何か

田北氏は研究のために長崎における現地調査をはじめとする様々な機会に様々な方法にて史資料を収集している。これらは文字資料にとどまらず、絵画や写真、録音テープから映像資料に至るまで媒体も多種多様である。このうち戦前に入手したものはすべて、1944(昭和19)年、戦禍から逃れるために田北氏自身の手により天理大学附属天理図書館(以下、天理図書館)に寄贈されたそうである。経緯は「天理図書館所蔵の潜伏キリシタン資料を周って」と題して『ビブリア 天理図書館報』(39, p.33-40, 1968.7)(以下、『ビブリア』)に詳しく書かれているが、その中で田北氏自身が「田北コレクション」と呼んでいることもあり、この資料群をさしあたり「田北コレクション」として紹介する。ただし、天理

図書館でそのような呼称が対外的に示されている訳ではない。というのも、準貴重書の扱いとして同館に保管されているものの、残念ながら人間の一生に相当する75年が経過しようとしている現在でも未整理のまま閲覧が叶わないためである。とはいえ、本来であれば数々の貴重書の整理が完了したのちに着手するはずの準貴重書の整理を今夏に再開されたそうである。昨今の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」としての世界文化遺産登録などをきっかけとした社会からの注目度上昇の影響もあると思われるが、館内の厳しい人的環境を克服しようとする取り組みに感謝と期待をしている。

「田北コレクション」の概略と現状としては以上であるが、田北氏の収集史資料が天理図書館にたどり着いた経緯を紐解くことは、現象面だけでなく、宗教学という学問の意義と、宗教それ自体との関係に対する田北氏の考え方を示すことにもなるため、もう少し詳しく紹介したい。田北氏自身『ビブリア』の中で、この経緯を示すことが、a) 姉崎正治氏の達見、b) 天理教2代真柱の中山正善氏の学界活動、c) かくれキリシタン研究の発展の初期段階、の3つを披露することになる旨を述べている。a)としては、田北氏のかくれキリシタン研究は帝国学士院(現・日本学術会議)の研究補助費によって始められたが、この補助金は当時の同院長・姉崎氏の決定によるものであること。また、「信仰の意義、身命を賭していとわぬ宗教生活の意義を捕えること」が姉崎氏のキリシタン研究に向けた「焦点」であると田北氏は見ているが、まさにこれが田北氏自身の「焦点」であり、「身命を賭していとわぬ」のは研究に対する田北氏の姿勢そのものであること。そして、この研究が、かくれキリシタンを単なる学問の対象から田北氏の宗教心を刺激するものへと変化させたこと。さらにその敬愛してやまない姉崎氏から、完成して間もない天理図書館および中山氏を紹介されたこと、などである。b)としては、中山氏は天理教の真柱としての側面に留まらず、宗教学会や民族学会に出席するなど研究者としての一面も持ち合わせていること。一宗教の代表者であることが研究を制約することはなかったようである。また、遡ること中山氏の卒業論文も、田北氏のそれ「小学校児童の宗教心」と同様に、天理教入信の動機を質問法に基づき調査・執筆されたものであった。戦後の録音に際しての援助なども合わせ考えると、中山氏が田北氏の研究に対してある種の共感と期待を持っていたことは容易に想像できる。そもそも天理図書館は中山氏の崇高な理念と政策のもとに創設されたのであった。c)としては、かくれキリシタンの現地に足を運び、人々に溶け込むことで得た「情報」を自ら記録・整理して「資料」にしたこと。田北氏は既存の史資料を収集しただけではないのである。それゆえ主著『昭和時代の潜伏キリシタン』は当該分野研究における基本的かつ最重要な文献のひとつとして現在も重宝されている。どんな分野の研究にも史資料が十分に揃わない未開拓段階においては先駆者たちが共通して苦勞する問題であろうが、宗教学およびかくれキリシタンの性質上特にその傾向が顕著なのかもしれない。

このような大きな流れとは別に、見落とせない地下水脈のごとき流れがあったことも記しておきたい。『ビブリア』記事の末尾に「追記 天理図書館への保管に関係したのは、神戸の池永博物館長の山口雅生氏であると、同氏の著作に出ている」[ママ]と2行のみ記載がある、かつて神戸に存在した(正しくは)池長(南蛮)美術館の山口雅生氏との関わりである。山口氏の著作『長崎丸山花月記』(1968)(特にp.264-272)に興味深い記述がある。山口氏は長崎の生まれで、二十代の頃、長崎学の基礎を築いた市井の郷土史研究者・古賀十二郎氏の私塾に通っていたという。その古賀氏を、小説家・幸田露伴の弟であり歴史学者として知られる幸田成友氏が田北氏を伴って訪れたとのことである。そして田北氏や山口氏を含む古賀氏一行は、現在は長崎市南西部に含まれる深堀地区のゼンチョ(善長)谷から俵石山に登り、付近のかくれキリシタンの里を訪ね歩いたそうである。そのときに共有した感動や経験が、山口氏をして田北氏への写真機の貸与やフィルムの現像・焼き付けの手伝いなど、田北氏の研究を支援する関係へと発展し、ひいては収集史資料を天理図書館で保護してもらうよう約束を取り付ける成果へとつながる。

(2)「田北コレクション」の内容

田北氏の「かくれキリシタン」研究の集大成とも言える『昭和時代の潜伏キリシタン』(1954、ただし第3版;1978を使用)(以下、『昭和キリシタン』)の「第二章 歴訪と発見: 隠れ方・隠し方」に「H 入手資料目録」(p.46-56)として、田北氏が地道に収集した史資料の一覧がある。そしてこの冒頭に「戦前入手のものはすべて」天理図書館に保管されている旨が記述されている。しかし、未整理のためどれが天理図書館に所蔵され、どれが所蔵されていないのか明確に判別できない。そこで、上述の「入手資料目録」から必要と思われる箇所をここに転記したうえで、個々の入手時期を『昭和キリシタン』から読み拾って本章に記載しておきたい。このことで、「田北コレクション」の整理の際に、あるいは整理されたのちの近い将来に調査・研究をされる方が「入手資料目録」と「田北コレクション」の現物との突き合わせをする際に、多少でも作業が容易になれば幸いである。

ただし、録音テープと映像資料は戦後のものであることがハッキリしているため、また写真は約630種と膨大であり、かつ『昭和キリシタン』の記述だけでは同定・識別と入手時期の判別が不可能なためここでは触れない。また、絵画や雑多諸々の文書についても割愛する。したがってここで扱うのはp.46~51のものとなる。

なお、周知のことではあるが、「田北コレクション」となった広義の「お帳」について一瞥しておきたい。かくれキリシタンは生月・平戸地方と外海・長崎・五島地方の二系統に分けられるが、前者は「納戸神」により後者は「お帳」(広義)により特徴付けられる。そして「お帳」(広義)は外海・長崎・五島地方のキリシタン秘書の総称であり、「天地始之事」¹⁾「オラ

シヨ本」「日繰帳」の3つに大別される。「天地始之事」は聖書の教えをまとめたものと思われるが、地域の自然や通俗伝説などが加わり、さらに様々な混乱・錯綜が見られる内容となっている。「オラシヨ本」は“Oratio祈り言葉”を書き記したものであるが、様々な祈りがあり、「コンチリサンのりやく」(痛悔・悔い改めの心得を記した書)「ロソンのオラシヨ(ルソンのオラシヨ)」(1591年に教皇グレゴリウス14世が与えた免償が伝承されたもの)など独立したものもある。また「日繰帳」は各種典礼のために必要な教会暦である。

1) 天地始之事(八種)(特に『昭和キリシタン』p.76-77を参照)

●凡例:表題(田北氏付与)/筆者,入手年(or発見年)[S=昭和](例:S6=昭和6年),備考1-備考2-備考3-…(敬称略)

①助右衛門本/久松助右衛門,S6,小学生用ザラ紙ノート-表紙花鳥図入-19.5×14cm-上下2冊②久市本(1)/松尾久市,S6,同前-表紙「綴方草稿帳」と印刷-20×14cm③下川本/下川某?,S6発見,半紙半折④久市本(2)/松尾久市,S6,小学生用ザラ紙ノート-表紙軍艦画入-19.5×14cm⑤(道脇)増太郎本/不明,S6,美濃紙半折-59枚-1ヶ所紙よりで仮綴⑥下村(善三郎)本/不明,S6,美濃紙四折⑦基督一代記/不明,S6・7頃,半紙半折-表紙に「耶蘇基督一代記」⑧文政本/不明,S13発見,和紙四折横綴-22×15cm

*①～⑧はすべて戦前入手、天理図書館所蔵と思われる。

2) 日繰帳(十一種)(⑫は1954(昭和29)年入手とのことで割愛)(特に『昭和キリシタン』p.177-179を参照)

●凡例:表題(何年頃の暦なのかに基づいて田北氏付与),入手年,本文頁数

①文化本,S6,17②明治本,S14?,5③奈留島本(昭六本),S7,12④大七本,S7,4⑤大九本,S14?,5⑥大十本,S14?,6⑦大十一本,S14?,6⑧大十五本,S14?,4⑨昭二本,S7,4⑩昭十一本,S14?,4⑪昭十二本,S14?,4

*『昭和キリシタン』p.177に①～⑪は「昭和六年から同二十七年までに入手」とある。②⑤⑥⑦⑧⑩⑪は1939(昭和14)年にカトリックに帰属した方々より入手の旨の記載があるためそれ以降には違いないが、実際の入手時期は定かではなく、どれが天理図書館に所蔵されているのかも不明。①③④⑨は戦前入手、天理図書館所蔵か。

3) 祈禱書(十四種)

●凡例:表題(田北氏付与)/筆者,入手年,備考1-備考2-備考3-…(敬称略)

[黒崎地方]①久市本(1)/松尾久市,S6,中学生用ノート29枚-ガラスペン②久市本(2)/松尾久市,不明,中学生用ノート34枚-ガラスペン-「諸々の祈禱付立帳」と表記-オラシヨ33種③助右衛門本/久松助右衛門,S6,半紙-紙よりで入念に綴じ-表に「表記」-毛筆-大部分赤インキ-オラシヨ18種④檜山本/不明(入手先・下村善三郎),S6(7),半紙四折横本-55枚-既成の帳面に厚紙の表紙-見返しに「大正拾参年正月旧曆拾六日書」-毛筆-能筆-オラシヨ45種⑤文政本/不明(『天地始之事』⑧と同一人物),不明,美濃紙四折横本-51枚-表紙なし-最後の1枚欠-④の原本か

[五島地方]⑥八十松本/不明(入手先・本村八十松),S6,半紙二折-14枚-表紙は反物の包み紙-表紙に「御長証、大正九年申改正」⑦増太郎本(1)/道脇増太郎,S6,半紙-114枚-漁網用丈夫木綿糸綴-扉に「御らつしよ」、表紙に「きとう文」-「昭和貳年正月調製」-オラシヨ97種⑧増太郎本(2)/道脇増太郎,S6,半紙-29枚-表紙は反物包の厚紙-「御書書」-「大正拾年式月調書記」と肩書、「信じ奉る」と左方に脇書-オラシヨ40数種⑨増太郎本(3)/道脇増太郎,不明,半紙-10枚-「初穂を上げる時のオラシヨ」⑩最後のオラシヨ/不明,不明,半紙-5枚-最後のオラシヨのみ記載

[天草地方]⑪山下(民三)本/不明(入手先・山中新蔵[←山下民三より譲渡]),S6,折本-71折-コンチリサンとつづく[生月地方]⑫船原本/船原定吉,S7,多くの漢字に前半はひらがなを後半はカタカナを併用-漢字を音標文字として使用していると推察-オラシヨ28種+番外4種⑬松永本/松永寿義,S7,ほぼ全文ひらがな-オラシヨ28種+番外4種⑭村川本/村川其吉郎,S7,漢字とカタカナ-漢字を音標文字として使用していると推察-オラシヨ28種+番外4種

*②⑤⑨⑩以外は戦前入手、天理図書館所蔵か。②⑤⑨⑩も戦前入手の可能性あり。

4) コンチリサンのりやく(一名:十七ヶ条)(十種)

●凡例:表題(田北氏付与)/筆者,入手年,備考1-備考2-備考3-…(敬称略)

①増太郎本/[道脇増太郎?],不明,奈留島永這で入手-祈禱書⑦の一部分?②十七嘉十/不明,不明,美濃紙半折-26枚-表紙に「明治十二年卯三月七日 鷓之瀬堤村与左右エ門」③福島本/不明,不明,美濃紙半折-29枚-奈留島大林で入手④平田(八蔵)本/不明,S6,美濃紙半折-84枚-福江島観音平で入手-文字大きく拙⑤文政本/不明,不明,美濃紙四折横綴-55枚-厚表紙-筆跡優秀⑥序文のみのもの/不明,不明,半紙-9枚⑦覚之万/不明,不明,半紙-4枚-「文化七年」と表記⑧こんちりさまのてほん/不明,不明,美濃紙四折-11枚-小本-文字拙⑨天草本(1)/不明,S7?,折本-17折⑩天草本(2)/不明,S7?,折本-26折-毛筆細字-筆跡やや可

*④のみ戦前入手を確認、天理図書館所蔵か。⑨⑩のS7入手は断定できない。この3種以外は入手年不明であるが戦前入手の可能性あり。

5) ロソンのオラシヨ(ルソンのオラシヨ)(二種)

●凡例:表題(田北氏付与)/筆者,入手年,備考1-備考2(敬称略)

①天草本/不明, S7?, 半紙二折-15枚 ②増太郎本/[道脇増太郎?], 不明, 美濃紙四折横綴-15枚

*①のS7入手は断定できない。②の入手年は不明。ただし、戦前入手の可能性あり。

6) お水帳(「御水帳」とも。洗礼台帳のこと)(三冊)(いずれも1876(明治9)年から1877(明治10)年頃のもの)

①35×15.5cm。唐紙149枚綴。②③32×12cm。やや厚めの洋紙に石版刷罫線入。56枚綴。

*①②③はいずれも入手年は不明のため天理図書館に所蔵されているかどうか不明。なお、①は大きさ・枚数を比べると立教大学海老沢有道文庫のもの(海老沢氏の採寸では35.3×15.2cm、同文庫の書誌では150丁。100名/綴の300名分を合綴して1冊にしたもの)と似ている。同文庫の所蔵は田北氏が海老沢氏へその研究とともに託したものである。海老沢氏が『基督教史学会会報』(24, p.3-4, 1955.7)で古書市場にバラで現れた平戸の御水帳の一葉について紹介したところ、田北氏は自分が持つ御水帳を海老沢氏の元へ届けたという。この譲られた御水帳の研究成果を「明治迫害期における切支丹社会の考察：五島青方天主堂御水帳による」(『史苑』17-2(通巻75), p.109-150, 1957.1)として発表している。『昭和キリシタン』の初版が1954(昭和29)年刊行であるから、①は田北氏が戦後に入手したもので天理図書館に所蔵されておらず、まさに同文庫の所蔵なのではないか、という低いかもしれないが可能性としては頭をよぎる。また、②③は洋紙とのこと、寡聞にして他の同例を知らない。未見の形態の御水帳が存在するのか、それとも想像している御水帳とは異なる洗礼台帳が存在するのか、興味は尽きない。

(3)「田北コレクション」の価値

当該コレクションは、かくれキリシタン信徒が保持し、場合によっては使用していた(今後も使用する予定の)“現物”であることが多いと考えられる。得難いものを得られたのは田北氏が信徒たちとの間に信頼関係を築き上げていた所以に他ならない。ただそれ以外にも、謄写版(ガリ版)印刷や陽画感光紙による複写、あるいは透写や単純な書き写しといった臨機応変の工夫を施していたことも見逃せない。このことで現物と交換して入手することが可能となったのである。この現物の価値はいかほどのものであろうか。『昭和キリシタン』の中で詳細な比較・検討が行われており、田北氏以前に比して以後は自ずと価値低減の要素があろう。しかしながら、近年でも現物を用いた分析が見られることに照らせば、その整理・公開の意味は現在でも少なからず存在するものと思われる。特に御水帳は個々が固有の内容を記載された1点のものであろうから、(天理図書館に所蔵されていればの話だが)まだ緒についたばかりの研究(長崎県小値賀町教育委員会・平田賢明氏などによる)がさらに深められることを期待している。このように今後が期待できるのも、言わば“史資料疎開”の受入先である天理図書館の功績だと言えるのではないか。この英断に感謝しつつ、「田北コレクション」の整理・公開という春の訪れを心待ちしたい。

終わりに

タイトルの「キリシタンに導かれて」は、「求道二十年」に添えられた田北氏自身の言葉である。「求道二十年」は、安田貞治編のカトリック入信記『神との出会い—21人の回心記』に収録(『なぜ私たちは信じたか』『わが告白』にも所収)されており、田北氏の魂の遍歴を辿る上で欠くことのできない資料である。そこには、「私の宗教心は、キリシタン研究とともに高まり、私の信仰は、日本にある各種の宗教を比較しつつ深まっていく」とある。田北氏の生涯は、自らの信仰を愚直に探し求めるなかで、様々な人々や様々な宗教との出会いの人生であった。かくれキリシタンの人々を見出し、その信仰、行事、習慣を調べていく過程は、自らの信仰を深める道でもあった。田北氏にとっては、かくれキリシタンの研究は、その言葉どおり「本を書くことよりも宗教的に深まることが大事」だったのである。

田北氏は晩年加藤かけいが主宰する名古屋の「環礁」句会に所属し俳句を嗜んでいる。「教会暦がキリストの生涯と結びつくと同時に、季節感がともなう点を重視し、日本では、それが俳句となって庶民の芸術心をうるおしている点を重視します」「一つのことを17音詩にまとめて、何回も音読しながら、各人の過去、現在の体験を噛み締め、味わうことは、反省と感謝の宗教へと進ませます」とあり、趣味の俳句もまた自らの信仰を深めるためのひとつの手立てであったのだろうか。

生月島の博物館「島の館」敷地内には田北氏の句碑が建っている。そこには、1980(昭55)年11月にローマで、コルベ神父とおなじくポーランド出身の教皇ヨハネ・パウロ2世との特別謁見を許された際に『昭和時代の潜伏キリシタン』とともに献呈した掛け軸に浄書された「被(かぶ)らめやキリシタン島の春の土」の一句が刻まれているという。

(1:川簾 陽子、2:加藤 富美、3:山邊 美津香、4:加藤・川簾・山邊の共同執筆、5:石田 昌久)

田北耕也氏略歴

西暦(和暦)	年齢	
1896(明治29)年	0	11月12日、奈良県月ヶ瀬石打で田北貞、フミエの子として生まれる。
1914(大正3)年	18	三重県立第三中学校(伊賀上野)卒業(3月)。 慶應義塾大学部予科入学(3月)。
1915(大正4)年	19	父死去(1月末)、慶應義塾大学部予科退学。
1917(大正6)年	21	日本組合基督教会大阪教会宮川経輝牧師より受洗(プロテスタント)。
1919(大正8)年	23	大阪高等工業学校(現大阪大学工学部)採鉱冶金科卒業(3月)、東北帝国大学理学部助手(12月)。
1920(大正9)年	24	東北帝国大学理学部助手退職(7月)、大阪基督教青年会商業学校教諭(8月)。
1921(大正10)年	25	大阪基督教青年会商業学校退職(11月)、熊本市内の私立大江高等女学校教諭(12月)。
1923(大正11)年	27	熊本県出身の荒木ヒサと結婚。
1924(大正13)年	28	熊本市内の私立大江高等女学校退職(3月)、松山市内の私立夜間商業学校教諭(4月)。
1926(大正15)年	30	九州帝国大学法文学部入学、長女黒崎京誕生(1月5日)。
1927(昭和2)年	31	松山市内の私立夜間商業学校退職(3月)。
1928(昭和3)年	32	学士論文のためキリシタン村歴訪開始 長女を研究対象にした論文「二歳児の形態知覚に関する一実験」(『心理学研究』3(4))を発表。
1929(昭和4)年	33	九州帝国大学法文学部卒業。卒業論文「キリシタン部落の社会的研究」。 活水女子専門学校教授(4月)。長崎伊王島を調査。
1930(昭和5)年	34	帝国学士院の研究補助支給決定(3年間)(2月)、活水女子専門学校退職(9月)、長崎県立長崎高等女学校(高等部)教授(嘱託)(9月)。 姉崎正治氏より個人的に指導を受ける。 一燈園(創始者、西田天香氏)に入信(8月)。 長崎から西彼杵郡黒崎村におよぶ調査。 コルベ神父の通訳として修道院内に起居。『聖母の騎士』の出版企画に参加。
1931(昭和6)年	35	五島・生月のフィールド調査に着手。4月16日 黒崎村で「天地始之事」入手。
1932(昭和7)年	36	九州大学附属図書館長佐野勝也教授の斡旋により同図書館で採集資料展示会開催(5月)。
1933(昭和8)年	37	長崎県立長崎高等女学校(高等部)退職(3月)、京都府認可私立燈影尋常小学校主任(4月)。
1937(昭和12)年	41	京都府認可私立燈影尋常小学校退職(8月)、長崎県公教神学校教授(9月)。
1938(昭和13)年	42	大浦のキリスト教会で家族とともに長崎司教山口愛次郎神父より受洗(カトリック)(6月4日)。立会人:奥村不二彦・秀子夫妻、撮影:山口雅生氏。
1940(昭和15)年	44	長崎県公教神学校退職(3月)、長崎東陵中学校長(3月)=現長崎南山学園(認可設立の年)。 五年間、研究を中断(長崎神学校での多忙な生活と戦争による)。
1941(昭和16)年	45	長崎東陵中学校退職(10月)、浦上神学校長事務取扱(10月)、長崎県立長崎中学校教授(嘱託)(12月)。
1942(昭和17)年	46	浦上神学校退職(3月)、長崎県立長崎中学校教諭・舎監(3月)、公立中学校教諭(11月)。
1944(昭和19)年	48	長崎県立長崎中学校舎監退職(8月)、公立中学校長、長崎県立諫早商業学校長兼同工業学校長(8月)。
1945(昭和20)年	49	終戦(8月)。
1946(昭和21)年	50	長崎県立佐世保商業学校長、佐世保市立商業学校長(3月)。
1948(昭和23)年	52	長崎県立佐世保商業学校長兼佐世保市立商業学校長および同商業学校長退職(9月)。 名古屋移住。 名古屋外国語専門学校教授(現南山大学)(9月)。
1949(昭和24)年	53	南山大学宗教学教授就任(4月)、南山大学教授兼南山中高校主事(5月)、南山大学附属人類学民族学研究所創設、正所員(比較宗教学)。
1951(昭和26)年	55	南山中高校主事(兼務)を解く。 南山大学で「キリシタン資料展示会」開催(11月)。
1953(昭和28)年	57	文部省各科学研究費(2年間)。
1954(昭和29)年	58	『昭和時代の潜伏キリシタン』刊行(10月)。 4年間の講演旅行(アメリカメソヂヤン宣教会他)。
1955(昭和30)年	59	学識上の視察のため1年間アメリカ合衆国への出張(8月8日～)、アメリカ合衆国への出張期間を1957年3月末日まで延長。
1957(昭和32)年	61	ローマ訪問、教皇ピオ12世に拝謁し『昭和時代の潜伏キリシタン』を謹呈、5月28日帰国。
1960(昭和35)年	64	南山大学退職。
1962(昭和37)年	66	第二バチカン公会議発会式列席。
1965(昭和40)年	69	名古屋女子商科短期大学教授。
1967(昭和42)年	71	同朋学園宗教学教授・講師、名古屋造形短期大学教授。

西暦(和暦)	年齢	
1977(昭和52)年	81	同朋学園宗教学教授・講師退職、名古屋造形短期大学教授退職。
1980(昭和55)年	84	バチカンにて教皇ヨハネ・パウロ2世に特別拝謁を許され『昭和時代の潜伏キリシタン』(第3版)を謹呈。
1981(昭和56)年	85	8月15日妻ヒサ死去。
1982(昭和57)年	86	大西洋岸北米の女子修道院に招かれ、別館で1982年4月より半年間過ごす。
1983(昭和58)年	87	生月島堺目のかくれキリシタン御堂の落成式に出席。
1994(平成6)年	97	2月19日、心不全のため死去(享年97歳)。
2009(平成21)年	-	生月島に句碑建立、11月23日除幕式(博物館「島の館」敷地内:長女黒崎京氏(83)の申し出による)。

【引用・参考文献】

- ・「求道二十年」田北耕也『神との出会い：21人の回心記』安田貞治編(春秋社, 1960)
 - *この「求道二十年」は次の2件にも収録されている。
 - ・安田貞治編『なぜ私たちは信じたか』(吉祥寺カトリック教会, 1959)
 - ・安田貞治編『わが告白』(緑地社, 1967)
 - ・田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』(日本学術振興会, 1954)、『同』(3版)(国書刊行会, 1978)
 - ・「かくれキリシタン研究者・田北耕也氏の業績」中園成生(生月町博物館 島の館だより)9, p.17-21, 2005.3
 - ・「かくれキリシタン研究の発展：古野清人教授の近著に因んで」田北耕也(キリシタン文化研究会会報)復刊3(4), p.10-13, 1960.3
 - ・皆川達夫『オラシヨ紀行：対談と随想』(日本基督教団出版局, 1981)
 - ・「特別再録 隠れキリシタン発見余聞」皆川達夫, 田北耕也『天地始まりの聖地:長崎外海の潜伏・かくれキリシタンの世界』松川隆治 [ほか] 編(批評社, 2018)
 - ・五味巖 [ほか] 編『素顔の名古屋教区：松岡司教の司祭叙階五十年記念』(松岡司教の司祭叙階五十年「記念事業会」, 1968)
 - ・小崎登明『長崎のコレベ神父：聖母の騎士物語』(聖母の騎士社, 1983)
 - ・アントニオ・リチャールディ著；西山達也訳『聖者マキシミアノ・コレベ』(聖母の騎士社, 1982)
 - ・「コレベ神父列聖記念特集 昭和の殉教者 聖マキシミアノ・マリア・コレベ」(聖母の騎士)増刊号, 1983.1
 - ・「コレベ神父に学ぶ土着と超越」田北耕也(聖母の騎士)31(12), p.24-27, 1966.12
 - ・「愛と祈りで征服された話：コレベ神父列福に当って」田北耕也(聖母の騎士)37(10), p.2-5, 1971.10
 - ・「桜桃にて花隠す納戸神(私の中のコレベ神父④)」田北耕也(聖母の騎士)53(4), p.15, 1987.4
 - ・「敗戦の平和と聖母被昇天(私の中のコレベ神父⑧)」田北耕也(聖母の騎士)53(8), p.15, 1987.8
 - ・「太郎かな秋の彼岸の龍宮城(私の中のコレベ神父⑨)」田北耕也(聖母の騎士)53(9), p.15, 1987.9
 - ・『Hominis dignitati 1932-2007：南山学園創立75周年記念誌』(南山学園, 2007)
 - ・「中部キリシタン史に見る日本人の世界性」田北耕也(同朋学報)18・19合併号, p.50-90, 1968.12
 - ・「現地報告(一)：プロローグ」田北耕也(声)885, p.34-37, 1951.9
 - ・「悟りから恩恵へ」田北耕也(声)1285, p.48-51, 1986.11
 - ・「田北氏による写本『天地始之事』の発見」黒崎勝(名古屋キリシタン文化研究会会報)4, p.28-29, 1972.9
 - ・「天理図書館所蔵の潜伏キリシタン資料を周って」田北耕也(ビブリア 天理図書館報)39, p.33-40, 1968.7
 - ・『小値賀諸島の文化的景観：野崎島キリスト教関連資料保存調査報告書』(小値賀町文化財調査報告書, 24)(長崎県小値賀町教育委員会, 2018)
 - ・「キリシタンの歴史を辿る：復活期の史料『平戸御水帳』の紹介を通して」石田昌久, 加藤富美, 関谷治代, 山田直子(南山大学図書館カトリック文庫通信カトリコス)29, p.2-8, 2014.11
- なお、[田北耕也著作リスト](#)を後日、図書館Webページに掲載予定である。

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信
カトリコス No.34 2019.11.1発行
<http://office.nanzan-u.ac.jp/library/>
編集・発行：南山大学図書館 カトリック文庫委員会
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
Phone : 052(832)3707 / Fax : 052(833)6986
* 図書館Webページでもご覧いただけます。